

近代経済学双書 7 金融論 原正彦 著

近代経済学双書

伊達邦春・柏崎利之輔 責任編集

7

金 融 論

原 正彦 著

同 文 館

・著者紹介・

はら まさ ひこ

原 正 彦

1928年 高知市に生まれる

1953年 明治大学商学部卒業

1958年 同大学院商学研究科博士課程修了

現 在 明治大学商学部教授（商学博士）

著 書 『金融経済の理論』文雅堂銀行研究社
（1967年），『図説金融論』（共著）学文
社（1971年），『金融論』（共著）有斐閣
（1975年）ほか

訳 書 E・リンダール『貨幣および資本理論の
研究』文雅堂銀行研究社（1962年），D・
ライツマン『金融理論入門』東洋経済新
報社（1975年），P・デヴィッドソン『貨
幣的経済理論』（監訳）日本経済評論社
（1980年）

《検印省略》

昭和58年9月1日 初版発行

略称一近経⑦金融

近代経済学双書 7

金 融 論

定価 ¥1,900

著 者 原 正 彦

発行者 中 島 朝 彦

発行所 同文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町1-41 〒101

電話（東京）294-1801～6 振替東京0-42935

© M. Hara

印刷・製本：KMS

Printed in Japan 1983

ISBN 4-495-41591-3

『近代経済学双書』の刊行にあたって

近代経済学を10の分野に分けて、その全貌をできるだけ平明に解明しようとするのが、本双書の主たる狙いの1つである。初めから終りまで1人の執筆者によって論述された著作の場合、文体や叙述が言葉の正しい意味において統一されており、したがってそのような著作は読者にとって最も読み易い形のものと言えよう。この点を考慮して、本双書を、各巻とも1人の執筆者による著作という形で、編さんするに至ったのである。

新しい理論を展開することには、もちろん大きな魅力がある。しかし同時に、新しい理論の背後に横たわっている理論の歴史も、見逃すことのできない関心事である。本双書ぐらいの分量のなかで、この魅力と関心事の両者を巧く斉合させて表明することは、必ずしも容易ではない。それにもかかわらず、敢てこれを試みようとするのが、本双書のもう1つの主たる狙いである。

現代における経済学は、いま非常に重要な曲り角に来ており、近代経済学ももちろんその例外ではない。このように経済学について改めて考え直してみなければならない時機に、本双書が経済学に興味をもち、経済学について考えてみようとする人たちに多少なりとも役立ってくれるならば、編集者としての願望これに過ぎるものはない。

1980年2月

『近代経済学双書』責任編集者

伊 達 邦 春

柏 崎 利之輔

は し が き

本書は、**ポスト・ケインズ派の金融論**である。より正確には、ポスト・ケインズ派金融論の模索の書といったほうがよいであろう。わが国では、ケインジアンやマネタリストの金融論は数多くみられるけれども、ポスト・ケインズ派の金融論はいまだに書かれていないからである。

ポスト・ケインズ派の経済理論が独自の体系をもつものとして認められるようになったのは、それほど古いことではない。この理論には、二つの流れがある。一つは、構造分析的ポスト・ケインズ派ともいうべき流れで、きわめて高い抽象のレベルのもとで、経済の基礎的な構造関係——たとえば、資本蓄積や分配のメカニズム——をえぐりだそうとするものである。いま一つの流れは、貨幣分析的ポスト・ケインズ派であり、抽象のレベルをもっと現実世界に近づけて、貨幣経済の態様を分析しようとするのである。本書が後者の流れにそって書かれたものであることはいうまでもない。

1960年代の中頃から70年代の初頭にかけて、マクロ経済における貨幣の重要性をめぐる問題が、かなりの論争を呼んできた。これまでのケインジアンの経済学は、マクロ経済変数を決定するさいに、貨幣をごく限られた重要性しかもたないものとみなす傾向があった。貨幣が重要でなければならないケインズの経済学から、貨幣が重要でないケインジアンの経済学に変質してしまったのである。本書の

分析目的は、こうした変質過程を明らかにし、ふたたび貨幣が重要でなければならない理論をとりもどすことにある。本書の目的が、**貨幣的経済理論**の構築にあるといいなおしてもよい。

そのためには、60年代の中頃から70年代にかけての論争の契機となったマネタリズムを克服しなければならない。一見すると、マネタリズムは貨幣の重要性を強調するようであるが、その基底には一般均衡体系にもとづく実物体系がすえられていて、貨幣は名目値を動かすヴェールにすぎないものだからである。われわれは本書をつうじて、こうしたマネタリズムおよびその基礎をなす一般均衡分析を批判し、ケインズの描いた貨幣経済が一般均衡の手法を用いて分析できないことを明らかにする。そういう意味で、本書は**マネタリズム批判**の書でもある。

本書を書きはじめで、3年近い歳月がすぎた。この間、明治大学や金融学会、さらにポスト・ケインジアン研究会などの多くの人たちから、御指導と励ましをいただいたことに感謝したい。それに加えて、若い金子邦彦君、渡辺良夫君と3人で10数年来つづけてきた研究会が、この本の完成に役立ったことを記しておきたい。

本書がポスト・ケインズ派金融論の発展のための一里塚ともなれば、望外の喜びである。

最後に、筆者の遅筆に耐えられ、励ましつづけていただいた、出版部の池田勝也さんにお礼を申し上げたい。

1983年8月

原 正 彦

——近代經濟學雙書（全10卷）——

責任編集 伊達 邦春
柏崎利之輔

- | | | |
|----|-------------|---------|
| 1 | 近 代 經 濟 學 史 | 柏 崎 利之輔 |
| 2 | 価 格 理 論 | 伊 達 邦 春 |
| 3 | 所 得 分 析 | 春 日 正 孝 |
| 4 | 經 濟 変 動 論 | 大 谷 龍 造 |
| 5 | 寡 占 經 濟 論 | 吉 岡 恆 明 |
| 6 | 財 政 學 | 早 見 弘 |
| 7 | 金 融 論 | 原 正 彦 |
| 8 | 国 際 經 濟 學 | 山 本 繁 綽 |
| 9 | 經 濟 政 策 論 | 小 西 唯 雄 |
| 10 | 計 量 經 濟 學 | 妙 見 孟 |

目 次

第1章 ポスト・ケインズ派金融分析への途———3

- 1 新古典派金融理論の非妥当性3
- 2 貨幣経済の基本的性格6
 - 貨幣経済の発展 6 債権の優越的地位 8
 - 金融論の分析対象 10
- 3 「期待」の取扱いをめぐる方法論.....17
 - 不確実性と現実世界 17 新古典派にみる
 - 「期待」の取扱い方 19 ケインズの「期
 - 待」の取扱い方 22 ケインズの三つのモ
 - デル 25
- 4 モデルの選択.....28
 - 均衡モデル vs. 歴史的モデル 28 経済学
 - における思考の性質 33

第2章 貨幣の本質と機能———35

- 1 ゆれる「貨幣観」35
- 2 貨幣の基本的性格.....37
 - 不確実性・貨幣・契約 37 貨幣の定義
 - 40
- 3 貨幣の機能.....43
 - 二つの3幅対——ヒックスの問題提起 43

ケインズによる貨幣の機能分析	45	貨幣
の機能にかんする要約	49	
4 諸経済モデルと貨幣	51	
ワルラスの一般均衡モデルと貨幣	52	貨幣
幣数量説と貨幣	53	現代の新古典派モデルと貨幣
54		
5 ケインズ経済モデルと貨幣	57	
第3章 貨幣供給の決定理論	61	
1 通貨学派 vs. 銀行学派	61	
2 銀行のバランス・シートからみた貨幣供給	64	
現金通貨供給の仕組	64	預金通貨供給の仕組
67		銀行部門の統合バランス・シート
69		
3 貨幣乗数および貨幣供給関数	71	
基軸貨幣乗数	71	公衆および商業銀行の行動
74		貨幣供給関数
78		
4 原因としての貨幣——マネタリストの主張	81	
マネタリズムの基本命題と貨幣供給	81	
二つの根拠とその批判	83	
5 結果としての貨幣——ポスト・ケインズ派の主張	87	
貨幣供給の内生性	87	二つの貨幣供給の過程
89		ポスト・ケインズ派における貨幣供給の位置づけ
93		

第4章 貨幣需要理論————97

- 1 貨幣需要理論の二つの発展方向……………97
- 2 ケインズの流動性選好理論……………100
 - 貨幣需要理論としての数量説 100 流動性選好理論 102 流動性選好理論をめぐる論争 106
- 3 新古典派の貨幣需要理論……………111
 - トービンの流動性選好理論 111 フリードマンの貨幣需要理論 116
- 4 ポスト・ケインズ派の貨幣需要理論……………120
 - 金融的動機 121 資本資産の需要価格 123 貨幣需要関数の定式化 125
- 5 貨幣需要理論と経済モデル……………127
 - 貨幣的名目所得理論——マネタリスト・モデル 128 マネタリストのパラドックス 131 貨幣的生産理論——ポスト・ケインズ派モデル 132

第5章 貨幣的市場理論————137

- 1 時間を含む市場組織……………137
- 2 クラウワーの不均衡理論……………139
 - 伝統的価格理論 139 クラウワーの再決定仮説 141 不均衡分析の意義と限界 145
- 3 ケインズの市場理論……………147

市場の自律安定化機構	147	現物市場・
先物市場のメカニズム	151	ブートスト
ラップ理論——一つの歴史的経験	156	
4 価格調整と数量調整	161	
調整速度の逆転	161	価格と数量の同時
調整	163	
5 新古典派批判への視角	165	
第6章 投資決定の市場機構	171	
1 ケインズの2財・2価格水準モデル	171	
2 ケインジアン「所得—支出」分析批判	174	
IS—LMモデル	174	ケインジアン体系
のヴァルナラビリティ	177	IS—LMモ
デルにおける投資の未決定	181	
3 投資と利子率	183	
投資関数のミクロ的基礎	183	資本財の
需給と利子率	185	投資の利子率弾力性
	187	
4 資本蓄積の過程	192	
時間を含む市場での投資決定	192	資本
蓄積——逆ざやのケース	196	過剰資本
——順ざやのケース	198	
5 2価格水準モデルの含意	201	
第7章 投資とファイナンス	207	
1 ファイナンス分析の重要性	207	

2	資本主義的ファイナンスの基本的特質	210
	資本主義的ファイナンスとはなにか	210
	ファイナンスの二つの役割	212
3	負債構造と投資決定——ミンスキー・モデル	215
	ミンスキーの two-price-level model	
	215 資本資産の需要価格の決定	216
	企業の資金調達行動と投資決定	221
	金融不安定性仮説	223
4	自己金融の理論——アイクナー・モデル	226
	自己金融理論の系譜	226
	マーク・アップ率の決定	229
	アイクナー・モデルのインプリケーション	233

第8章 金融資産市場の動態——235

1	二つのポートフォリオ理論	235
2	金融資産の発生とその蓄積	238
	金融資産はなぜ存在するのか	238
	国民貸借対照表	240
	経済成長と金融資産の蓄積	244
	金融資産市場の基本的性格	245
3	ポートフォリオ均衡理論——トービン・モデル ...	247
	近代化されたポートフォリオ理論	247
	資産の一般均衡分析	249
	所得フローの決定——トービンの q 理論	254
4	代替的なポートフォリオ理論——デヴィッドソン・モデル	258

ポートフォリオの位置づけ	258	証券資
産に対する需要と供給	259	証券資産市
場の動態	262	追加的資本需要と資金循
環	265	家計のポートフォリオ均衡の攪
乱	267	

5 実物セクターと金融セクターのリンケージ	270
-----------------------	-----

第9章 現代の金融政策とその批判——275

1	きびしい現実の経済	275
2	マネー・サプライ重視の金融政策	278
	金融政策のフレームワーク	278 マネタ
	リストの金融政策	281 金融政策における
	ルールと裁量	283 金融政策の最終目
	標と諸手段	285 貨幣的コントロールの
	メカニズム	288
3	これからの金融政策	292
	二つの指導原理	292 金融・財政政策の
	一体化	296
4	新しいポリシー・ミックスを求めて	299

第10章 なぜ貨幣は重要か——むすび——303

1 貨幣の再発見	303
2 一般均衡分析批判	306
3 ネオ・マーシャリアンへの途	310

引用文献	313
事項索引	323
人名索引	330

金 融 論

第 1 章

ポスト・ケインズ派金融分析への途

1 新古典派金融理論の非妥当性

資本主義経済は貨幣の働きのもっとも発達した経済である。企業が生産活動や投資活動を行なうためにも、また企業によって生産された財およびサービスが商人の手をつうじて流通し、家計がこれらを購入して消費生活を営むためにも、貨幣を必要とする。われわれはこうした生産・交換・消費といったすべての経済活動のすみずみにまで貨幣の入り組んだ経済を、貨幣的生産経済 (monetary production economy) と呼ぶことにしよう。

われわれが金融論を学ぶのは、このように現実の経済の働きが貨幣量や貨幣制度、さらには国民の貨幣に対する態度などに依存しているからである。実際に、現実世界のどんな経済問題を取りあげても、金融にかんする知識を抜きにすることはできないであろう。たとえば、経済成長や景気変動は適切な時期にどれだけ貨幣量を増減させるかによって大きく左右されるであろう。また大量の失業者の発生が貨幣化された経済のもとでの投資の不安定性に根ざすことは、多くの人びとの認めるところである。インフレーション、貧困、低開発といった現実の解決を迫られる諸問題は、いずれも貨幣にか